

5 亥の子の餅

旧曆十月の亥の日にボタ餅をつくって収穫を祝う。

大堂神社では、十月十三日に芋の子祭りともいって子孫繁昌と豊作を祈願して祭りをする。

6 お日待

旧十月十四日より若者が寄って餅をつき、精進料理で一夜を過ごし、翌十五日は未明に起きて川で禊をして日の出を拝み太陽に感謝をする。この日は魚もんで精進落としをした。

7 村祭り

秋の収穫が終わり一息ついた霜月(旧十一月)になると、農村部の集落では村祭りが行われる。セツカンマツイ(赤飯祭り)といわれるように、子供から老人まで村人全員が集まって赤飯を腹いっぱい食べて豊作を感謝する祭りで、第二次世界大戦前までは各組毎に免田(祭田・共有田)があったので、その年の当番が耕作し収穫した米は祭りの神饌とし直会で神とともに食べた。陣内では十二月十八日に行われる。子供たちは祭りの数日前から薪木を拾



村祭り(陣内)

い集め、当番の家から藁をもらい、祭りの前夜に太鼓を打ち鳴らしながら田の中でホンゲンギョウをする。当日は当番の家で赤飯を蒸し集落中のハシのとれる者全員が集まって赤飯を食べ、昼は青年たちの世話で戸主が集まって夕方迄酒宴が続けられた。

他の集落の祭りもほぼ同じである。いくつかの集落の祭り日を記しておく。为重―旧十月十五日、赤飯祭り、渡端―旧十一月第二亥の日、弁財天祭り、三重―十二月十五日、いしき祭り。

四 民間信仰

路傍や寺社の境内に造立されているおびただしい数の石仏・石塔・堂宇などは民間信仰の遺物であるが、今日でも最も身近かな信仰の対象としてさまざまな願いがよせられている。そして、これらの神仏の祭りや講は、年中行事や家の行事のなかに災害防除・家内安全・病氣平癒などの祈願行事として組み込まれている。

(一) 観音信仰

町内に現存する堂庵には観音を本尊とするものが多く、観音の結縁日である十七日には主婦を中心として毎月

観音講を行っている集落や春秋の彼岸には遍路の接待や、夏の子供たちの年中行事となつている観音さんの豆祇園(千灯籠)、四方六千日など観音信仰は幅広い信仰対象となつている(年中行事・夏の行事・祇園参照)。

観音信仰は仏教の渡来とほぼ同時に日本にはいり、奈良朝にいたつて法華経の普及とともにひろまつたといわれる。観音は観世音菩薩とか観自在菩薩と呼ばれているが、常に世間の音声を観じて救済の手を垂れるので観世音といい、また無畏(安心)を施し不安を除くので施無畏者とも呼ばれている。

衆生済度のためにいるるな姿に変化するが、一般には六観音とか七観音と呼ばれ聖(正)・千手・馬頭・十一面・准提・如意輪・不空罽索を組みあわせて呼んでいる。なお、平安時代末期には三十三化身の数からくる、観世音菩薩を本尊とする三十三カ所の寺を巡礼する三十三カ所巡礼の風習がはじまり、西国三十三カ所をはじめ各地に三十三カ所観音霊場がつくられるようになり広く一般に普及することになった。

観音は、ほぼ慈悲相であるが頭上に馬頭を戴く馬頭観音は忿怒の形相をしている。ヒンドウ教のビシュヌ神の化身の一つが仏教にとりいれられたものといわれる。形相から交通業者など馬にかかわる職業の人々によって信



馬頭観音 (太田路傍)



十一面観音 (太田)

仰されることが多く、馬の供養や無病息災を祈つて建立されたもので、太田の路傍にある文化九年(一一八二)の像は当村馬持中により建立されたものである。また、馬は農耕にかかせぬものなので農家では屋敷神として祀っているところもある。

(二) 地藏信仰

地藏は最も庶民的な菩薩の一つで道路の傍らや寺院の境内などに祀られているが、庶民のあらゆる願いをかなえてくれる仏として種々の目的や祈願をこめて建立されたものである。

釈迦入滅の後、弥勒仏が五十六億七千万年の後に出世するまでの五濁無仏の悪世の間にこの世に現われて六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)の衆生を(一切の生物)を救済する菩薩といわれ、平安中期ごろから末法思想のひろまりにつれて広く信仰されるようになった。さらに、近世になって民間信仰と結合し、病氣平癒・子授け・安産など身近な信仰の対象となった。

町内に見られる地藏尊は、合掌をした独尊像と三界万霊と刻された供養塔のうえに建立されたものがある。三界とは欲界(食欲・性欲など欲の世界)、色界(物質の世界)、無色界(欲も物もない世界)の三つをさし、万霊すなわちこの世の生きとし生けるものすべての霊をこの塔に宿らせているという意味をもっている。陣内の集落の西、新川樋門の横に文化元年(一一八〇四)に加与丁・陣内の若者中によって建立された地藏尊がある。ほかに銘は不明であるが為重・上下の路傍、東光寺(下大津)の境内などにあり、三界万霊のうえに建つもので古いの

は宝光院（太田）の境内に明和六年（一七六九）に建立されたものがある。
六道を輪廻転生（流れる意）する衆生を救済するということから考えられた六体の地蔵は六地藏と呼ばれ寺院の境内や墓地にみられる。典拠となるものは経軌にないので、諸説があつて一定しないが、一、二を示せば表4のようである。これが造型化されたものであろう。

（一）内は持物及び印相

表4 六地藏典拠

六道	出典	
	大	日
地獄道	大定智慧地蔵（宝珠・錫杖）	仏説地蔵菩薩発心因縁十王經
餓鬼道	大徳清浄地蔵（宝珠・与願印）	金剛願地蔵（間魔幢・成辨印）
畜生道	大光明地蔵（宝珠・如意）	金剛宝地蔵（宝珠・甘露印）
修羅道	清浄無垢地蔵（宝珠・梵篋）	金剛悲地蔵（錫杖・引接印）
人道	大清浄地蔵（宝珠・施無畏印）	金剛幢地蔵（金剛幢・施無畏印）
天道	大堅固地蔵（宝珠・経帙）	放光王地蔵（錫杖・与願印）
		預天賀地蔵（宝珠・説法印）

六地藏には六体の像を一つ一つ彫つたものを六体並べたものと、石幢に六体の像を彫つたものがあるが町内には後者の六地藏が寺院の入口や境内に見られる。為重多聞院境内の六地藏（建立年不明）は諸富町重要文化財の指定をうけている。ほかに福田円光院入口に永禄十年（一五六七）の六地藏が一基、建立年不明であるが西寺井安龍寺境内に三基、下大津東光寺、三重円城寺、大堂村永仁寺廃寺跡、橋津の路傍など町内の随所にみられる。円光院の六地藏は「妙祐逆修善根也」の銘がある。これは死後の仏事をあらかじめ自分で営む逆修仏事のために建立されたものである。

特異な地藏としては新北神社

神殿裏に天明八年（一七八八）造立の愛宕大権現の像がある。

甲冑で武装し馬に跨った異様な姿の像であるが、これは愛宕権現の本地仏勝軍地蔵で、その名から武士の信仰を得、民間では火伏せの神として信仰されていたものである。



地藏尊（下大津・東光寺）



愛宕権現（三重・新北神社）



六地藏（福田・円光院）

(三) 講

人々が集団社会で共同生活を営むうえで、いろいろな結合関係のもとでいくつかの集団が組織されている。政治的機能を持つものや宗教的機能あるいは経済的機能を持つものがあり、その構成は世代・年齢・性・信仰・職業などを同じくするもので、集落の集団として重要な機能を發揮している。

これらの集団のうち〇〇講というように講の名称を冠したものは宗教的機能や経済的機能を持つものが多い。もともと「講」というのは、僧尼の仏典講究の集會を呼んでいたが次第に世俗的なものになり多種多様な講集団が結成された。近世には宗教的意義が薄らぎ親睦を主とした形に変化してきた。すなわち、講員が一堂に相集まり宗教的行事を行い宴食を共にして歡樂の一日を過ごすというのが一般的な形であり、遠くの名山靈社への信仰は物見遊山を兼ねたもので講金を積立て年に一、二度数名の者が講を代表して参拝し、神札を受けて帰って講員に配付するという代参講形式で行われるが多い。

同一職業の仲間が集まった講として太田に大工仲間の太子講があつた。聖徳太子を祖神とする講で、毎月一回集まつて情報の交換や申しあわせ、質金の協定などをしていた。

また、経済的機能を持つ講としては、寺院などで行われた千入講と呼ばれる無尽講(頼母子講)があつたが、近代的金融制度の整備に伴い衰退してしまつた。

ここでは宗教的な講に限って代表的なものについてとりあげてみよう。

1 日待・月待講

太陽と月は古くより崇拜や祈願の対象とされ、一定の日に忌みごもりをして日の出や月の出を拝するという待行事を伴つた講がある。

旧十月十四日に行われるお日待は、仲間同士で決められた宿に集まり餅をついて供え、精進料理で一夜を過ごして日の出を拝して解散し後に精進落としての宴を行った。

月待も日待と同様で、特定の月齢の夜に集まり月の出を待つという行事である。佐賀においては三夜待と呼ばれる旧二十三夜の月待が最も普遍的で広く行われている。

「この夜の月は三つに分かれて出て、後に一つになる」という伝承があるが、これは満月・新月・暗月の月の盈虚の三相を表わしたもので、人々の生活が月の盈虚と不可分の関係にあつたことを表わしている。

為重では、もとは毎月一回行っていたが終戦後年一回となり現在は旧七月二十三日に行われている。八坂神社(祇園社)境内に勢至菩薩を彫つた二十三夜塔がある(勢至菩薩は月待の本尊月天子の本地仏で全国的に多くみられる)。台座に次の銘文が刻まれている。

二十三夜尊

明治卅一年旧七月二十三日勸請

我里自古待二十三夜尊

講
矣以故我徒十名歎無殿

宇明治廿二載興親陸講
社月次以其夜釀繒錢勤
不怠十年至萎十金乃相
地之宜其地係千西田儀
右工門宅地就謀之則喜
附其地内經營以明治三
十一年陰曆七月二十三
日竣工學奉祭式記春雨
有時俛降救秋早禱天向
待人事以祈我里之永遠
豊福 山田歳雄謹書

八坂町創立者

三島半蔵	西田儀右工門	野中與吉
古賀久助	水町伊兵衛	西村惣平
光延忠兵衛	井上嘉兵衛	
井上伊八	山田繁太	

2 庚申講

十干(甲・乙・丙・丁・戊・巳など)と十二支(子・丑・寅・卯・辰など)の組み合わせは甲子から癸亥まで六十種となり日時では六十日ごと、年時では六十年に一度めぐってくる。こうした十干十二支の組み合わせの一つの「庚申」の夜には眠らずに過ごして長寿を願う信仰があった。

わが国においては、すでに平安時代に始まっていたと考えられるが起源説は複雑で日本固有の祭りとする説や中国の道教の思想をうけたとする説もある。道教の影響をうけたとされる説は、人間の体内に潜む三尸さんしという虫が庚申の夜に、人が眠っている間に体内から抜けだして天に昇り天帝にその人の罪過をつけると、天帝はその罪により生命をちぢめるといっているので庚申の夜は眠らずに三尸の天上を防ごうというのである。

庚申信仰により造塔された石祠類は、その信仰形態が多彩であるように「庚申」の文字塔や「青面金剛」の忿怒像あるいは「猿田彦大神」の文字塔や像塔とさまざまである。「青面金剛」は仏教の方で本尊として広めたもので、また、神道の方では江戸中期に垂迦神道の山崎闇齋が、記紀にある国津神で天孫を道案内した「猿田彦大神」を庚申の主尊として神道庚申が広く普及した。

諸富町においては庚申信仰はあまり普及してなく、三重の新北神社境内に寛政九年(一七九七)の「庚申」碑と路傍に



庚申 (三重・新北神社)



二十三夜尊
(為重・八坂神社)

慶應元^丑年（一八六五）建立の「猿田彦大神」の塔があるぐらいである。三重では正・五・九月に庚申さん祭りをしてい

3 伊 勢 講

各集落には仲間同士の親睦講として三夜待とともに伊勢講があった。本来は伊勢信仰つまり伊勢神宮の信仰集団であったが、近代以降、信仰的意識が薄らぐにつれ懇親的要素が強くなった。

伊勢神宮は明治以後、戦前まで国家神道の中心であったが、もとは伊勢地方の地方神を祀ったもので五世紀以降、天皇家と結びつき神社のなかで最高の地位をえるようになった。当時は一般民衆の私幣は禁じていたが経済的基盤の変化により地方の武士階級さらに、中小名主層から農民や商人など、さまざまな階層の支持をえるようになった。

さらに、御師層（下級の神役人）の台頭により、やがて伊勢講という信仰集団が組織され講金を積立て交替で参宮を行う代参講が一般化した。

代参をすませたおりに記念として建立する伊勢講碑は、文字塔と神像を彫ったものがあり文字塔は「天照皇太神宮」「天照太神宮」「太神宮」など



天照皇太神宮（徳富二区）



伊 勢 講（小 杭）

と刻まれている。

町内には広く分布しているが、特に大堂神社境内には数多くの塔が残っている。表5に町内の主な伊勢講碑を掲げておく。

表5 伊 勢 講 碑

建 立 年	所 在 地	建 立 年	所 在 地
明曆四年（一六五八）	徳富一区（南江越）	元禄十三年（一七〇〇）	大堂・大堂神社
万治三年（一六六〇）	下大津・東光寺	元禄十六年（一七〇三）	三重・新北神社
寛文六年（一六六六）	大堂・大堂神社	元禄年間（一六八〇～一七〇三）	三重・新北神社
寛文八年（一六六八）	三重・新北神社	寛保元年（一七四一）	上下・公民館
延宝四年（一六七六）	下大津・東光寺	宝曆十一年（一七六一）	三重・新北神社
元禄六年（一六九三）	徳富二区（元 村）	安永七年（一七七八）	大中島・弁財天社
元禄十一年（一六九八）	徳富二区（迎小路）	大正三年（一九一四）	西 搦・龍宮社
元禄十三年（一七〇〇）	為 重・八坂神社		

（建立年 不明のものは省略）

小杭では文政年間（一八一八—一八二九）からの祭帳が引き継がれており、現在も二仲間において伊勢講が二月十一日（もとは毎月十一日）に行われている。この日は、講員全員が元方の家に集まって、黄粉餅・煮〆・ナマス・ウドンなどで会食をする。また、徳富二区（迎小路）では毎月一回、茶講が行われている。

太神宮は農業神としての信仰が篤いので表5のように農業集落に祀られているのが多く、氏神社として祀っている集落もある。

諸富新村の公民館内に天照太神宮と刻まれた自然石が鎮座しているが、これは文政年間に太田・小杭・石塚・徳富などから二、三男が分家して新村をつくったときに守護神として建てられたとつたえられる。

加与丁（下）では、毎年代表者が伊勢神宮へ参拝をしていたが、経費や日数の都合で参拝が困難となったので石祠をたて代参のかわりに祭りを始めたのが、現在の太神宮の由来と伝えられている。

4 英彦山講

福岡・大分の県境にそびえる英彦山（二二〇〇呎）は、古くから修験道の拠点として西日本地域の信仰をあつめて栄えていた。

英彦山と肥前佐賀との縁は昔から深く、参道近くの青銅製の鳥居は二代藩主勝茂が寛永十四年（一六三七）に、寄進したもので上宮・中宮・下宮の改修、再建も鍋島家が勧進元になったものである。藩をあげての信仰の厚さは農民にまでおよび、英彦山参りの講（英彦山講・権現講）を組織し、共有田をつくったり抜き米をして財源とし毎年代表者を選んで参拝した。英彦山の坊では肥前からの参拝者には二の膳に夢の餅で歓待をした。坊は集落

や家により異なつた。坊名は古老の記憶にないが佐賀県の信者がよく利用した了乗坊の永代記録帳（明治末期）に、加与丁・太田・小杭などの集落名がみえた。

講により建立されたとおもわれる塔が二基残っている。野町の旧公民館に「英彦山大権現」と彫られた文政八年（一八二五）の塔があり、台座には十数名の講員の名が刻まれている。また、西寺井の安龍寺（真言宗）境内に元禄三年（一六九〇）の塔がある。

講は戦前まで、いくつかの集落で行われていた。小杭では、もと三つの講があり三月十五日に権現講を行い、英彦山には数年に一度山参り（参拝）をしていた。施主を引き継ぐ通渡しは、非常な賑わいで仮装をし芸者を入れ三味線で囃しながら次の施主宅まで行列をつくっていた。

徳富は現在も英彦山講が行われている唯一の集落である。もとはゲンベエ組・ナグサミ組・ヤツシャ組など四つの組があった。正月十五日に施主宅に集まり朝はウドン、夜は膳で会食をし英彦山参りの計画を話しあつた。英彦山参りは二月十五日で古くは徒歩、のちに自転車となり昭和三十年頃はバス、電車、汽車を乗りついで参拝していた。留守宅では参拝者の無事を祈り足の軽かごとといって上宮茶講をしていた。参拝をすませると、祈禱札・英彦山ガラガラ・飯勺子などを土産に帰途につき、熊笹をとって帰り田の中にたて虫除けにした。施主の引き継ぎは、ナマスを肴に酒をくみかわして祭帳・掛軸を受け渡した。



英彦山講（徳富）

次に徳富の祭帳を参考として掲げておく。

昭和参年新立
英彦山社祭帳
旧貳月拾五日

一、三味線代仲間中ヨリ出ス事

(以下、講員名省略)

- 一、飯シ一人前ニ付温頓壺斤ノ事
- 一、金一人前ニ付金五拾銭出シノ事
- 一、神酒料一人前ニ付七銭出シノ事
- 一、毘酒壺升
- 一、酒座差合乃節ハ送膳之事
- 一、膳廻リ事
- 一、一人前ニ付金五拾銭仕出屋ニ頼み乃事内ヨリ膳廻リ
- 一、豆腐 煮 一皿
- 一、牛蒡 煮 一皿
- 一、ぬ津べい 一皿
- 一、神酒拾七銭ト三味線代拾八銭共ニ一人ニ付参拾五銭ノ事



英彦山塔 (野町・旧公民館)

(四) 屋敷神

屋敷の一隅にひっそりと祀られている小石祠がある。氏神社のように地域の共同の神としてではなく特定の個人の信仰の対象となつていゝるもので稲荷・恵比須・中央などさまざまで、農業神・福神・地神・厄除神と幅広い性格をもつていゝる。

この種の小石祠のうち町内に最も普遍的な「中央さん」と呼ばれる屋敷神についてみてみる。

中央神は高さ三、四〇センチの自然石の表面を駒形状に削平して「中央」「中央尊」と陰刻してあり、屋敷内の東北隅(艮)または西北隅(乾)に祀られていゝる。特に丁重に祀つてもよくないし、粗末にしてもいけないといゝ、よくさわる(たたる)神といわれ、ときおり花をあげるぐらいである。

中央神信仰の性格は明らかでないが『佐賀民俗第九号』(市場直次郎)によれば、

「地神をかまど神と同一神格であるとし、かまどを神座とする荒神に対してこれと区別して地荒神を中央神と称したと思われるふしがある。一略一肥前僧が伝承する『仏説地神大陀羅尼王子経』によれば、かまど神と地神とは同体であり、しかも中央に位置して守護するというのであるから



中央尊 (三重・新北神社)

荒神信仰の流布した地方の民間で、地神を中央神と称して崇敬したであろうことは想像して難しくない」とある。
「現在は家の新築や改築にともなって氏神社の境内に寄せられているものが多い。

(五) 船ふな 霊だま

海で働く人々に信仰される船の守護神で、帆船の頃は帆柱のかたわら、エンジン船になってからはエンジン室のかたわらに祀つてある。

船霊の神体はオヒナサマ（男女一对の人形）、銭十二枚（潤年は十三枚）、賽さいころ二個で船下しの際、大漁と海上安全を祈つて船大工が納める。船霊さんは夫婦神でバクチを好むので賽ころや銭を入れているという。オヒナサマは右に男、左に女を納め、賽ころはオモチ（船のへ先）を三の目、トモ（船の後の方）を四の目にして「オモチサザナミ トモニシアワセ ナカニニヲコメ ソトハゴトゴト」といった。

海で働く人々は陸の人々にくらべて、板子一枚下は地獄ということばの通り、さまざま不安がつきまといつた。それだけに災難や不漁を予告してくれる舟霊を大事に祀つていた。

船霊さんは海がシケるときに鳴いて知らせるといい、「チツチツチツ」とか「チュンチュン」と聞こえるという。エンジン船になって船霊さんの声も聞こえなくなった。

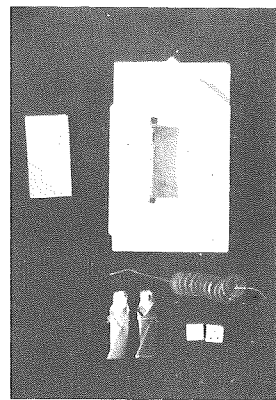
(六) 恵比須・大黒

諸富津・搦・大堂津など海に近い集落の路傍に狩衣・指貫に風折烏帽子をつけ釣竿を持って鯛を抱きかかえた円満な姿の恵比須像が多くみられる。恵美須・蛭子などと書くが古くは「夷」と書き、異境人の称であったが福德神の一つとして漁業神また商業神として崇拜されている。

諸富津の恵比須神は、文政三年（一八二〇）蛭子講中卯九月吉日の銘があり講仲間により建立されたものである。

漁村部だけでなく農村部の三重にも祀られているので、豊作を祈願する信仰もあつたとおもわれる。

恵比須とともに福德神の代表とされる大黒天は太田の宝光院（天台宗）の境内に一基みられる。大黒頭巾をかぶり左肩に大きな袋を背負い右手に木槌を持って米俵のうえに立った姿で、天保四癸巳年二月吉祥日（一八三三）當庵四世徳〇院〇〇の銘がみえる。



船霊さん（東搦）



恵比須（諸富津）



大黒天（太田・宝光院）

大黒天の信仰としては、県内の各地で旧十一月子の日に二股大根を供えて大黒を祀る風もみられる。本来は古代インドの民間信仰の神であったが後に仏教にくみこまれ、中国で厨房の神として寺で祀られるようになり、わが国では最澄により天台宗の寺院を中心に祀られるようになった。宝光院は天台宗であるところから、このような理由によるものかもしれない。

(七) 水神・海神

水をつかさどる神は水神・水天・川神・龍神などと呼ばれる。水の神は日常生活の水のほとりに祀るもの、水田の近くや灌漑用水のかたわらに祀るもの、海辺に祀るものなどがある。

日常の生活用水のほとりに祀る水の神は、野菜や食器を洗ったりするカワジ(水使い場)の近くに自然石や「水神」と刻んだ石祠を立てたりしたもので多くは屋敷神の一つとして祀られている。

春の初めに行われる川神祭りは、水への感謝と子どもたちが水難を免れるための祭りで、ヒヤランさんとも呼ばれ水神への願いがこめられている。水死はカワソウ(河童)に引きこまれておぼれると信じられていた。カワソウは川や池、沼などに棲むといわれる空想上の妖怪であるが、水神の零落した姿ともいわれている。

大中島の弁財天に、カワソウの手と称す木製の彫物が祀られている。伝承によれば昔、カワソウが弁財天に捕えられ、大中島の子どもは絶対にさらわれないと約束をして離されたという。

弁財天はもともとインドの一地方の河(川)神として尊崇されていたものが、仏教にとりいれられ農業神、水神として信仰されるようになったものである。町内では海に近い集落に多く祀られている。

渡端の氏神社弁財天は、一時大堂神社に寄宮されていたが、子どもの水難事故があいついたので再建立したもので、今でも毎月十五日と二十九日に主婦により弁財講が行われている。

大中島の弁財天は、昔大洪水のとき、中川副村中津から流れてきたもので、中津側と大中島において返す返さぬの争いがあったが、藩公がこれは因縁あつて大中島に流れついたので大中島に祀るべきと裁定をくだしたといわれる。境内には正保二年(一六四五)、安永七年(一七七八)の石祠も祀られている。

徳富の松土居の弁財天石祠は、建立年は不明(台座には昭和六年十二月吉日とある)であるが石祠中央に「辨才尊天仰願」とあり、右側に「肥前佐嘉走津新田鎮座守護」左側に「國家福祿長保安全」中央下に「海濱波穩民電烟連」とある。

いずれも弁財天の文字を刻んだ石祠であるが、西寺井安龍寺には江戸時代のおもわれる天女形の八臂(八手)の銅造の坐像があり、当時の信仰を知る貴重な資料として諸富



水神碑(舟津)



八大龍王(橋津)


町重要文化財の指定をうけている。

水神の一つに龍を祀る龍神がある。法華経に龍王は海中に住して雨をつかさどると説かれているが、民間信仰においては、これにもとづいて漁の神と雨乞いを祈る神と二面性を持っている。漁村では龍神または龍宮と呼び、農村では雨乞いの神として祀っており、諸富津や橋津に八大龍王社の石祠が祀られている。

(八) 荒 神

カマド（ヘッチイ）の神は荒神さんといってウウガマ（大釜）のそばの柱に小さな祠をもうけたり、ウウガマそのものを荒神として祀ったりする。

食生活を支える重要な場所であり、文字どおり荒々しく崇りやすい神でもあるので「荒神さんに足なんかくつぎ、バチかぶつ」といって足をのせたり腰かけたりすることを厳しくいましめた。

三重では西古賀の大蔵院や東古賀の明正院から荒神盲さんがきて、カマド祓いの経をあげていた。正月には荒神さん餅といって、ヘッチイの形（）をした餅を供えて感謝し、田植え前の田の神さんで、三把の苗を供えて豊作を祈願した。

よだれの多い子は荒神盲さんが首から掛けているすだ袋で拭うと止まるという俗信があった。

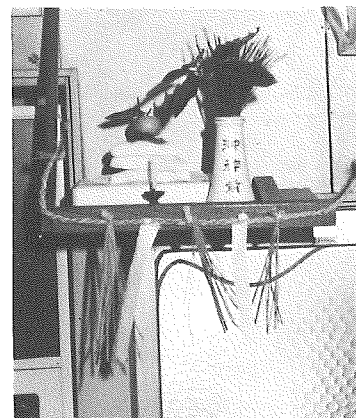
(九) 金立山信仰

佐賀平野の北部脊振山天山系の中央に位置する金立山（五〇一^ハ）の山頂近くに金立神社がある。祭神は保食神（豊字気毘売神かみ 穀物の神）、岡象売女命みづはめのみこと（弥都売女神やみ 伊邪那美命の御子、水の神、雨乞いの神）、徐福（農耕、養蚕、医薬の神）、天忍穂耳命あめのおしほみみのみこと（天照大神の御子）の四神からなっている。

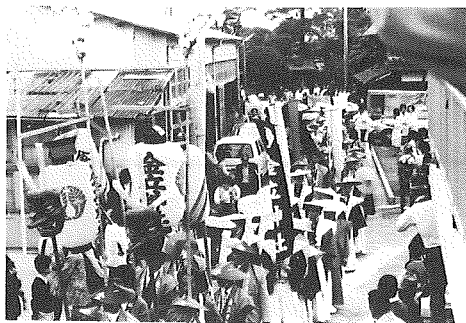
諸富町と金立神社とのかわりは祭神の一人である徐福の渡来伝説（伝説・徐福渡来参照）によるもので、徐福上陸の地といわれる據には金立神社が分祀されており、地元では徐福のことを金立さんと呼んでいる。

正月の金立さんみゃーい（詣り）は、佐賀平野の農民の年中行事として今日でも続けられており、「金立さんのお下り」として知られる雨乞い行事は、金立神社の祭神を有明海の沖の島に下向させて降雨を祈るといふ大規模なもので昭和十四年に実施されたのを最後とした。この雨乞い行事とは別に五十年に一度の例大祭が昭和五十五年に創建二千二百年祭として四月二十七日から三日間行われた。

お下りの道筋は、徐福金立入山の経路を逆にたどり金立から千布、高木を経て佐賀市内に入り唐人町から寺町に寄り、白山から紺屋町、今宿、江



荒神さん餅（諸富津）



金立さんのお下り

表6 大乘妙典塔

建立年	銘文	所在地
元禄十二年(二六九八)	奉讀誦法華壹千部 施主幸室妙慶	為重・多聞院
享保七年(一七二二)	奉漸讀誦法華妙典壹千部 三界萬靈	野町・旧公民館
延享五年(一七四八)	大乘妙典一千部 施主大園善左衛門 諸願成就之処	西寺井・安龍寺
宝暦元年(一七五二)	大乘妙典一萬部	三重・新北神社
不明	大乘妙典	太田・宝光院
不明	大乘妙典一千部	為重・多聞院
不明	奉漸讀大乘妙典壹千部之塔	三重・円城寺

るが「奉書納法華經一部一石一字處唱滿彌陀宝号三億遍」と刻まれており左側面に建立者らしき名がみえるが不明である。いずれにしても仏の功德を得ようとして造立した様子がうかがえる。

上から光法、そして諸富町に入り三重の新北神社前の境橋で神輿が諸富町内の氏子へと引き継がれ浮盆を経て東搦の金立神社下宮へ到着した。

(+) 經典供養塔

寺院の境内に「大乘妙典……」と刻まれた塔が建てられている。大乘妙典とは衆生を迷いから悟りの世界に導いてくれるその教えを記した教典のことで一般的には法華經をさしている。

この法華經を多数の回数読誦することは江戸時代には広く行われていたようで一千部あるいは一万部というように大量の読誦供養を行って大きな功德を得ようとしたのであった。

表6に町内の主な読誦塔を掲げておく。

また、經典を書写し、死者の菩提や所願成就を祈ることも広く行われていたようで一般には紙に写すが、小石に經文の文字を一個に一字ずつ書いて小石を埋めこの上に一字一石塔を建てることがある。三重新北神社の境内に天保二年(一八三一)造立の一字一石塔がある。おそらくどこからか寄宮の境内に寄せられたものとおもわれ



大乘妙典塔 (三重・円城寺)



大乘妙典塔 (三重・新北神社)